

日本の次郎たち

臨終の床で、母のお民は次郎とその乳母お浜に言う。「この子にもお前にも本当にすまなかつたと思うの。…子供ってただかわいがりさえすればいいのね。…あたし、このごろいつもこの子に心の中であやまっているの。…それが分かつたころには、もうお別れをしなければならぬ」。

『次郎物語』第一部の最も悲しい場面である。こんなに優しさに満ちた物語なのに、当時の軍部の暴圧の前に掲載中止になり、著者湖人も青年教育こじんの職を奪われるという運命をたどるのである。湖人はひたすら良心の自由を叫び続けていたからである。それこそ不法な権力が最も恐れるものである。

湖人は次郎物語を日本の親と教師に読まれることを一番願っていた。しかし、大人たちの無関心の中を、日本の少年たちは自らこれを選びとり、長く広く深く少年たちのよき伴侶はんりよとなつていった。ああ、日本の次郎たち。

湖人は言う。「子供が本能的に求めている最も大切なものを、拒こはんではならない人

によつて拒まれてはならない」。大切なもの、それは愛。拒んではならない人、それは親と教師である。愛されたい。最も根源的な自然の欲求である。しかし、ただ愛すればよいのではない。努力したい、自己創造に生きたいというのも自然の欲求である。第二の自然である。問題はこの二つの自然の欲求の順序を誤らないことだ。湖人が親と教師に本当に言いたいことはこれだった。

湖人七十歳、すでに不治の病におかされていた。生誕祝いの夕べ、弟子たちに一首を示した。「大いなる道というもの世にありと思つゝこころはいまだも消えず」

「お前は大分に骨を埋めよ」と言いわたした不肖ふしやうの弟子にまで、重篤じゆうとくの床からこの歌を書き送られる優しい師であられた。その夕べから四カ月たつて、日本の一つの良心は消えて行つた。

(一九八七年七月十日)